

第41回大日本耳鼻咽喉科會中國地方會記事

期 日 昭 和 1 4 年 6 月 2 5 日

場 所 岡 山 醫 科 大 學 生 化 學 教 室 講 堂

幹 事 小 田 大 吉 記

1. 舌血管腫の1例 岡 志 豆 雄 君

31歳の女に於て、其の舌背に生ぜる有莖の血管腫の1例に遭遇し、之を摘出するに殆ど出血を見る事なく手術を終へる事を得て治癒せしめ得たる1例を報告せり。(自抄)

2. 外傷に次で症状を顯はしたる鼻腔内血管腫の1例

附 所謂鼻血管瘤の成立に就て

原 半 三 郎 君

右側鼻閉塞及び右側鼻出血を主訴とせる11年2箇月の女子、約30日前、顔面に打撲を受け以來少量の鼻出血を來し、更に右側鼻閉塞を來せり。某耳鼻専門醫に治療を受けたるも輕快せず、種々検査の結果、鼻腔内に「血袋」があるとして、手術を慫慂され來院せるものなり。診るに鼻梁右側に輕度の腫脹及び壓痛あり。右側鼻腔は表面暗赤色、平滑、弾力性稍々軟、出血性の腫瘍により全く閉塞され、鼻腔側壁は骨壁を缺損せり。レントゲン検査により、右側鼻腔内に腫瘍を認め、腫瘍は更に鼻腔側壁を破り、右側上顎竇内に膨隆し、且下甲介骨は全く消失せり。之に對して和辻氏上顎竇根治手術を行ひ、腫瘍を摘出せり。腫瘍は下甲介より生じ暗赤色梅實大にして、内に凝血を入るる1箇の大なる空洞あり。臨牀上血管瘤といわれるものにして、組織的検査の結果、腫瘍實質は新生増殖しつつある毛細管よりなる毛細管性血管腫なり。本例は一見外傷性血管瘤の如くなるも、實は下甲介に先づ血管腫を作り、之が偶々外傷により組織内出血を來して、所謂血管瘤を形成せるものと推定さる。尚ほ演者は、演者の経験せる上顎竇

血管瘤2例に就き、其の臨牀經過並に其の組織的所見を述べ、これが成立機轉も亦鼻粘膜に先づ血管腫を生じ、之に種々なる原因が加つて組織内出血を來し、血管瘤を形成せるものならんと推定せり。(自抄)

追加 原 田 良 雄 君

符て手術不可能なる2例の血管腫に「ラヂウム」療法を試み或程度奏效せる経験を有す。第1例は左側耳下腺の前方に瀰漫性血管腫ある小兒に「ラヂウム」を貼用し略ぼ完全に奏效せり。第2例は頰部に血管腫ある成人、他の外科醫にて摘出を試みられたるも不成功に終れるもの、之に「ラヂウム」の貼用を試みたるも奏效顯著ならず、「ラヂウム」針の挿入によりある程度奏效せり。2例の小経験より觀るに小兒に於ては「ラヂウム」感受性高きためか比較的奏效顯著にして貼用にて奏效するとも成人に於ては「ラ」針の挿入によらざれば奏效せざる如し。「ラヂウム」の効果の程度、再發の有無等充分明かならざれども手術不可能なる症例には一應試むべきものならむ。

3. 壊疽性扁桃腺炎と「ズルフオンアミド」

製劑 原 半 三 郎 君

土 居 清 君

壊疽性扁桃腺炎に輸血の有効なる事は、既に一般に認められて居る所であるが、之を以てしても尚ほ好結果を來さざる場合も亦多い。演者は3例の壊疽性扁桃腺炎患者に於て何れも病竈より連鎖狀球菌を證明し、輸血を行ふと共に「ズルフオンアミド」製劑を用ひ、意外に良好なる結果を得、壊

痘性扁桃腺炎に「ズルフォンアミッド」製剤の著效あるを知り、其の3例の治驗例に就き、其の経過を報告せり。第1例、2年10箇月男子。猩紅熱に併發せる壞疽性扁桃腺炎。約20日前、全身に麻疹様の發熱と共に、急性扁桃腺炎を惹起し、咽頭「デフテリー」と考へられ、「デフテリー」血清注射5回受けたるも、發疹の消退を見たるのみにして一般状態は漸次悪化し衰弱甚だしく、遂に扁桃腺より軟口蓋に互り、廣範圍の潰瘍を形成するに至りたる患者に、以來毎日「テラボール」1筒、「グリゾン」0.5g、隔日に輸血20乃至30gを行つたところ、5日目より體溫下降し、咽頭所見も輕快、全治せり。第2例、1年9箇月の女子「デフテリー」に併發せる壞疽性扁桃腺炎。約10日前より發熱咽頭痛あり。「デフテリー」血清注射15000單位を行ふも輕快せず、漸次衰弱加はり、左右扁桃腺に大なる潰瘍を作りし患者に、輸血20gをなし以來毎日「グリゾン」1筒注射を行ひ、全治せしめたり。第3例、5年9箇月の女子。「デフテリー」に併發せる壞疽性扁桃腺炎。約3日前より發熱嚥下痛ある患者に、扁桃腺義膜より細菌検査を行ひしに、「デフテリー」菌及び連鎖球菌を證明し、血清19500單位注射及び輸血をなしたるにも拘らず、扁桃腺に潰瘍を生じたる患者に、以來毎日「テラボール」1筒注射、「グリゾン」0.7g内服を行ひしに、3日目より漸次回復全治せり。(自抄)

4. 扁桃腺周圍炎と「プロントジル」

黒川孝一君

第1例、29歳の醫師、右側扁桃腺炎にて1週間毎日「テラボール」2cc宛注射を行ひて輕快せし後、引續き左側扁桃腺周圍炎及び左側副咽頭間隙蜂窠織炎を來し「グリゾン」注射2cc宛2日間行ひしも輕快せず、依て當科に入院、第1日は「プロントシル」錠剤0.5gのもの6錠「プロントシル」注射5ccのもの2筒を行ひ第2日目は「プロントシル」錠剤4錠及び「プロントシル」注射3筒を行

ひたる處、症狀頗る輕快し、第3日目は下痢ありたる爲、内服は止め、「プロントシル」注射2筒を行ひて全く症狀去り、入院3日にて全治退院せるものにて、即ち本例は約10日間餘に渉り「ズルフォンアミッド」劑少量宛を殆ど毎日持續して用ひし結果、治癒が遷延し而も遂には増悪せしものが、3日間の本劑大量投與——副作用を考慮しつつ内服、注射を混用して可及的大量を與へ、病勢を頓挫せしめ極めて急速に良結果を得たるものなり。第2例、39歳の男子、左側扁桃腺周圍炎の進行中、「プロントシル」錠剤の少量投與にて僅かに病勢を頓挫せしめしも、再び増悪せし爲又「グリゾン」2cc宛2日間注射して化膿を防ぎ、斯くして化膿すべき豫定の日數を遷延して長く同程度の苦痛に悩み乍ら發病後11日目に當科に入院、其の後「ズルフォンアミッド」劑投與を中止し、超短波を應用して局所の變化を待ち、遂に入院2日目の夕方發熱と共に急に著し扁桃腺周圍の腫脹を來し、穿刺により初めて膿汁を證明し、之に切開を加へて排膿を計り、良好なる経過を取りて全治退院せるものにして、以上2例から扁桃腺周圍炎に對する「ズルフォンアミッド」劑の使用量及び使用時期に就き教へらるる點ありたるを述べたり。

(自抄)

追加 田中文男君

「ズルフォンアミッド」劑の效力の大なるは既に諸君の御承知の如くであるが、又此使用の爲病勢を頓挫せしめ又治癒を遷延せしむることあり。時には其の爲めに殊に用量不充分なる際は、非定型的経過をとり、診斷を困難ならしむる事さへあり。只今演者の報告せる第1例は、患者が醫師たりし爲、「テラボール」の少量を使用せしにより、初め扁桃腺の所見比較的輕く、而も之が急激に扁桃腺周圍及び頬部に擴がりしものにて、或は外部より切開のやむなきにやと思ひしに、「プロントシル」の大量使用により切開を要せずして治癒に

至りしものなり。又第2例は、初診當時扁桃腺周圍膿瘍としての定型的所見を呈せず、其の比較的長き刺戟的症狀の存在等よりして他の疾患を疑ひたるものなるも、入院後委しく既往症を聞くに及び、初めて此症狀の経過と「ズルフォナミド」剤との關係あるを明かにし、且其の後周圍膿瘍としての症狀を現はし來り、此處に其の全貌を現はしたものである。

5. 上顎竇に見られたる「ヒペルネフロー ム」の1例 黒川孝一君

59歳の男子。定型的なる左上顎竇惡性腫瘍症狀の他、時々起る多量の鼻出血を主訴として來院せる者にして、之に和辻式上顎竇開放術を行ひ摘出せる腫瘍に對して組織的検査を行ひ、意外にも副腎腫なる事を知れり。尙ほ患者は胸部腹部内臓其の他に異常なく、尿所見、血液検査にも異常なきものなるも、左季肋部及び左鼠蹊部の皮下表層に梅實大の腫瘍を認めたり。之をも摘出して組織的に検査し、之等と共に副腎腫なる事を認めたり。此上顎竇に見られたる副腎腫の發來経過は之が轉移によるものなりや、又迷芽によるものなりや直ちに斷定し難く、演者は今後の経過に俟つべきものなりと述べたり。最後に本腫瘍より得たる組織の顯微鏡寫眞、脂肪染色及び糖原染色を行ひたる圖を供覽せり。(自抄)

6. 成人に於ける咽頭扁桃腺肥大に就て

岡田 要君

患者は26歳の男子。高度の鼻閉塞及び難聴を主訴として來院せしものにて、精査の結果其の原因は大いなる咽頭扁桃腺肥大によるものなりし一症例なり。是に於て演者は、一般に咽頭扁桃腺肥大は小兒に多く見らるる疾患なるも、稀には斯くの如く成人に於て大いなる咽頭扁桃腺肥大を見ることあり、従つて他の鼻咽腔腫瘍との鑑別診斷上にも注意すべき症例なりと述べたり。(自抄)

7. 人絹工場従業員に於ける眼底異常と 鼻疾患との關係 志水 清君

8. 腎臓炎と扁桃腺摘出に就て

小坂 昭男君

奥島 芳夫君

扁桃腺炎を傳染源とする種々なる併發的疾患の内最も注意すべきものは腎臓炎であるが、此種の腎臓炎の原因的療法として、其の原病竈たる扁桃腺炎に對する治療、殊に此全摘出を施す可きである事は、常に吾々耳鼻咽喉科醫の唱導し來れるものなるも、未だ此點が一般内科醫に徹底し居らざる如くに見受けらるるのは甚だ遺憾とする所である。ところが幸ひ吾が日赤岡山支部病院に於ては内科醫が之をよく理解せる事により、吾々は最近扁桃腺炎に併發せる急性腎臓炎患者2例を内科より紹介され、之を診療する機会を得、之に對し口蓋扁桃腺摘出をなし、以後日を逐つて尿検査を行ひ手術後の腎臓炎の経過を詳細に觀察し得たので、其の経過の概略を表示せり。1例は扁桃腺摘出後10日目に尿中蛋白陰性となり以後全く全治す。他の1例は全治したとは云ひ難きも、扁桃腺摘出後日々尿蛋白量減少しつつある事は注意すべきであり、遠からずして全治するものと考へ居り、假に全治せざるも今後の腎臓炎の再發、或は増惡に對し良好なる影響を與へるものならんと信ず。(自抄)

追加

松井健次郎君

當田中臨牀に於ける昨年9月以來の本問題に關係ある症例9例に就て退院後の経過を調査せる結果、急性腎臓炎患者3例中全治1、輕快2、再發性腎臓炎患者4例中にては全治、輕快、未治、再發各1例にして、慢性腎臓炎患者に於ては2例中2例共輕快せるを見たり。之を通覽せるに、術前より増惡せりと思はれるものはなく、大體に於て腎

臓炎の豫後に對して好結果を招來するものなりと述べたり。(自抄)

9. ヴァンサン氏「アングナ」に就て

小坂 昭 男君

演者は本年2月より岡山赤十字病院に於て經驗せし2例(31歳及び22歳の男子)のヴァンサン氏「アングナ」に對し、何れも1回の「ネオアルサミノール」1號の靜脈内注射を行ひ、夫々10日乃至20日後に順調に治癒せりと述べ、本症は從來考へられたるが如く稀なるものに非ざる可き事及び本症の局所所見として、其の扁桃腺潰瘍は他の壞疽性扁桃腺炎の夫れに比して潰瘍周囲の反應性炎症の輕微なる點は、臨牀上多少の注意を要するものならんと述べたり。(自抄)

10. 藥劑中毒に因る内耳病變に關する

實驗的研究 登坂 清君

藥劑中毒に因りて發來する内耳の病變が、左右聴器に相對的に現はるものなりや、或は又兩者の間に何等かの差異の存するものなりやに就ては、只に聴器病理學上のみならず、臨牀上にも亦甚だ興味深き問題なるも、未だ信憑すべき實驗的研究を缺き、是に關する知見も亦明かならざるものの如し。茲に於て余は「モルモット」を材料とし、藥劑としては從來宮本及び尾錢等の實驗の結果よりして、容易に著明なる内耳病變を惹起せしめ得るものと考へらるる「アトキシール」を用ひ、之に依て種々なる程度の聴力障礙を起さしめ、この聴力障礙の程度を之に向つて余が考案せる裝置、即ち一定距離よりC₂—C₆に至る間の12箇の音を發せしめ、此際吹鳴らす壓力を耳鼓に加減して、「モルモット」に起る音響性耳鼓反射を目撃し、其の閾域刺激値を水銀壓力計の高さにて讀む事によりて測定し、一定の障礙を認め得たる後、種々の時期に於て生體固定を施し、之より内耳の組織標本を作り、或は田中氏法により其の神經組

織のみを検し、之が左右の病變に就て比較研究を施したるに、健康なる内耳——螺旋神經節細胞、コルチ器、脈絡帶、神經纖維等は全く左右相對的なるも、既に内耳が藥劑の侵襲を蒙るに至れば必ずしも相對的ならず。而して障礙の強きに従ひ、左右内耳間の差異は著明となれるものにして、且之等組織的所見は聴力検査の成績に一致する事を知れり。但し障礙輕度のもの、及び極めて高度の障礙を蒙りたる膜様迷路に於ては左右の差異は認め得ず。以上の所見を2,3の標本に就て述べたり。(自抄)

11. 鼻性腦膿瘍の1例

田村 誠彦君

演者は右側潜在性前額竇炎に續發せる前頭葉膿瘍の1手術例に就き、其の臨牀所見を報告せり。20歳の男子。數年前より時々兩側鼻閉膿性鼻汁輕度頭痛ありたるも放置せり。然るに本年2月25日頃高熱、惡感戰慄及び右側前額部の劇烈なる壓痛あり、3月下旬再び右側前額部腫脹並に壓痛を來して耳鼻科及び眼科の診察を乞ひ、眼底に著明なる視神經炎の所見を認めたるも鼻腔に於ては右側中鼻道粘膜の腫脹を見るのみにて膿性分泌物を認めず、腦脊髄液は中等度の壓上昇以外に著變なく海綿竇血栓疑はれしも前頭部腫脹は急速に頭部全體に波及し、外科醫により頭部骨膜下膿瘍の診斷の許に切開排膿を受け頭痛輕快し5月2日退院せり。然るに退院後十數日にして再び頭痛、眩暈、蹣跚、嘔氣嘔吐、便秘と共に右側前額部に輕度の腫脹を來せるにより5月24日再度外科を訪れ頭部骨髓炎の診斷を受けしも念の爲副鼻腔の詳細なる検査をすすめられ翌日耳鼻科を訪れたり。診るに患者は著しく衰弱し、反對側顔面神經麻痺及び偏癱、頸部強直、右側眼瞼下垂し、ケルニツヒ症狀輕度に認められ、輕度の發熱あるも脈搏正常、右側前額部は稍々腫脹、壓痛あり、固有鼻腔は初診時同様右側中鼻道粘膜の腫脹を認むる他依然膿性

分泌物を認めず、脳脊髄液は壓 340 mm, 透明, 細胞 20, 膿球を認めず、ノンネ土なり。以上よりして右側前額竇炎に續發せる前頭葉膿瘍並に漿液性軟腦膜炎及び膿瘍の増大して後方中心廻轉に及べる壓迫症狀ならんとの推測の許にレントゲン撮影を行ひ、右側前額竇上方に接して骨缺損と覺しき陰影を認めたるにより、即日キリアンの術式により右側前額竇を開放せるに竇粘膜は著明に肥厚し一部壞疽狀となり、外上方に於て骨壁に小指頭大の骨缺損及び肉芽に彼はれ暗褐色に變化せる腦膜の露出を認め此部に試験穿刺を行ひ膿瘍を證明せり。よつて膿瘍を開放せしに其の後は偏癱を訴へず腦膜炎症狀を見ず、頭痛も亦著しく輕快せるも、術後5日にして全身衰弱の爲心臓麻痺により遂に鬼籍に入れり。以上の所見よりして演者は、前額竇炎のため骨壁の骨炎を惹起して生じたる穿孔を経て侵入せる膿瘍ならんと推測するも、皆て海綿竇血栓併發を疑はしむる所見ありたるにより、或は竇血栓よりの血行性腦膿瘍をも疑ひ得るとなし、其の成立機轉に於て果して一元性なりや否やに幾分の疑問を抱き、且固有鼻腔の症狀甚だ輕度なりしを注意せり。(自抄)

12. 高度の呼吸困難を主徴とせる尿毒症の1例 守屋 誠君

患者は16歳の男子にして、3日前より顔面に浮腫を來し、2日前より呼吸困難となり、上氣道通氣障礙ありとの推測のもとに取敢へず氣管切開を施したるも、依然として呼吸苦しく、僅か2日間にして死亡せり。剖檢し、始めて強度の腹發性萎縮腎あるを發見し、尙ほ腦橋部に小動脈を中心とする出血あり、其の附近に浮腫を來せるを見たり。演者は本例に就き其の既往症、現症、並に剖檢所見を總合し、生前不知の間に繰返したる「アングーナ」性腎臓炎より續發性腎萎縮を來し、之より眞性尿毒症を惹起し、腦橋部の出血及び浮腫を來せし爲、呼吸中樞に影響を及ぼす事となり、か

かる性質不明なる強度の呼吸困難を呈したるものならむと結論し、斯かる呼吸困難を主徴とせる隠れたる尿毒症の存在し得る事は臨牀上注意すべき事とし、原因不明なる強度の呼吸困難に遭遇した場合に於ては、一應は斯かる方面にも考慮を置くの必要ある可きを指摘せり。(自抄)

14. 偏食患者と出血

細 見 英君

日常の食事が疾病時其の病氣の治療乃至恢復に向つて重要な意義あることは、吾々外科領域の醫師が直接に術後創面の治療に當り一層痛感するものにして、就中食物中に各種「ビタミン」の缺乏あれば夫々に應じて身體器官の機能障礙が起ることは既知の事實であつて、之を「ビタミン」Cに就て考ふるに、今假りに新鮮なる野菜、果物等は殆ど攝取せぬと言ふ如き偏食患者ありとすれば、之が長期に亙る場合血液性狀が變化して非常に出血性に傾き居ることあるべきは吾人の容易に思考し得るところならん。演者は最近觀血手術の施行後出血の著しかりし症例、即ち扁桃腺周圍炎に對し減張切開を加へたところ切開創縁より長時間に亙り後出血のありたるもの、扁桃腺切除後8日目に1側扁桃腺切除面よりの後出血を來せるもの、及び上顎竇根治手術後出血著しかりしもの等の3例に就き、其の經過の概要を報告し、特に演者は之等3例の平常の食事内容を調査せしところ、何れも野菜、果物等は殆ど攝取せぬと云ふ如き非常なる偏食患者たるを知りたり。即ち演者は以上の3例に就き術後性出血と患者の平常の偏食事實は決して偶然の關係に非ざるべきを信じ、吾々の如く日常多數の觀血手術を行ふ者にとりては、手術施行前、其の患者の既往症以外日常生活内容殊に食事關係に至る迄充分注意し若し偏食習慣ある者は其の術前適當なる準備期間を置きて偏食傾向の矯正を計るか、或は止血劑と共に「ビタミン」C並にB劑の補給的準備をなし置くな

どは吾人の執るべき一留意事項ならむと述べたり。(自抄)

追加 田 中 文 男 君

偏食が出血と創傷の治癒に對して大いに考慮さるべき事は私も感じて居り、又先の臨牀會總會で藤森君よりも興味ある報告があつたが、私もシュワルツエ氏手術後、肉芽の増殖悪き者に聞いて度々偏食せる事實あるを見る。最近シュワルツエ氏手術を行ひし小兒で肉芽の増殖非常に悪く、一部表皮が直接骨壁の上を被ふが如き1例の患者は非常なる偏食にて、1日3碗の飯に副食物としては生の胡瓜及び魚の刺身以外のものは生來食はない、果物も嫌ひであると云ふ様なものがあり、これが創面治癒に大なる關係を持つて居るものと思はれた。

15. (イ) 觸診用指「サツク」を利用せる

「ゴムタンボン、ドレン」の使用

經驗に就て 原 田 良 雄 君

鼻手術後「ガーゼ、タンボン」を挿入せばこれを除去する際疼痛あり、而も出血甚しき場合屢々なり。よつて之を防がんが爲、觸診用指「サツク」に多數の小孔を開け之に綿花を挿入せる「ゴムタンボン、ドレン」を使用せり。尙ほ演者は該「ゴムタンボン、ドレン」を上顎洞著膿症、篩骨蜂窠開放後、甲介切除等殆ど總ての鼻手術後に使用せり。とて、10數年來の經驗を述べ、且實物を供覽せり。(自抄)

追加 西 村 伊 勢 松 君

余は約7年前本地方會に於て上顎竇著膿症の和辻式根治手術の際、竇内「タンボン」に「ゴム」風船を用ひて非常なる効果を擧げ得たるを報告し、其の後も引續き同様の方法を行ひ居れり。其の方法は上顎竇内に「ゴム」風船を「タンボン」として挿入し、之に二連球を用ひて空氣を送入し、少しく膨れた所で前鼻孔に於て之を結ぶ。此方法は「ガー

ゼ、タンボン」に比して拔去時に苦痛及び出血が殆ど無きため、常に患者より感謝されり。尙ほ余は此際下鼻道粘膜を竇内に上方に向つて翻轉し居れるが、此方法は下鼻道手術孔の閉塞を防ぐに非常に大なる効果あるものなり、尙ほ又下甲介切除の際にも「ゴム」風船「タンボン」を用ひしに、此際は唯今原田博士の御演述の通り、風船内に「ガーゼ」を挿入して「タンボン」とせり。原田博士の指「サツクタンボン」の御話承り、矢張り同様の目的なるを知り、古き余の報告の御記憶を新にして戴かんが爲追加せるものなり。(自抄)

(ロ) 天疱瘡性口内炎の1例

原 田 良 雄 君

演者は、約90日前外陰部に水泡を生じたるに始り、約70—80日前左側頰粘膜より膿様分泌物を出せることありし1例に遭遇し、當時患者は疼痛無かりしも、其の内口腔粘膜の殆ど全部が糜爛し疼痛甚しく、一時は流動食の攝取すら困難となり、口唇にも糜爛面を生じ、漸次口唇粘膜部を越へ皮膚部に擴がれり。皮膚部に於ては先づ水泡を生じ破れて糜爛し一部痂皮を形成し、其の過程は定型的の天疱瘡を思はしむ。尙ほ同様な變化は鼻入口部、眼の周圍にも生ずるに至れり。よつて皮膚科の診を請ひしに増殖性天疱瘡なること判明、従つて口腔粘膜病變も亦天疱瘡なれるを確定せり。要するに口腔所見のみを以ては診斷困難なれるも全身所見を綜合して初めて確定し得るものにして、成書には最初水泡を生じ直ちに破れて赤色糜爛を生ずとあるも、可なり注意し居れるも水泡の時期は皮膚と異なり極めて短きためが見ること困難なり。従つて「アフタ」性口内炎、或は口腔糜爛等との鑑別困難なるも詳細に觀察せば次の點に於て異なれり。1. 口腔粘膜の病變は表皮角質層の脱落に止まり潰瘍にあらず單なる糜爛なること。2. 病變のどの部にも治癒の傾向なきこと。

(自抄)

16. 臨牀瑣談 小田大 吉君

1. 上鼓室前方に發達せる含氣蜂窠の處置に就て

耳性頭蓋内合併症の成立に關して、迷路前より錐體骨尖端に向つて發達せる蜂窠の意義は、マルクス¹⁾の報告以來殊に重視せらるるに至りしが、演者は乳嘴蜂窠鑿開に當り、フオス²⁾の術式によりて常に上鼓室を側方より開放して其の前方に於ける蜂窠の發育狀態に注意せり。今年1月より6月末日までに自ら手術せし76例中、自ら手術記事を精しく記せし60例(内、急性及び亜急性乳嘴突起炎51例)の乳嘴突起炎手術例に就き、手術によりて開放し得し上鼓室前方蜂窠、迷路周圍蜂窠(乳嘴洞より後方)及び乳嘴蜂窠の發達狀態を比較觀察せし所を圖示し、(1)急性乳嘴突起炎の大多數に於ては上鼓室前方に少なからざる蜂窠を認めしこと、並に其の多くは根治手術或は小聽骨を除去することなく、外聽道上壁上方即ち上鼓室側方の蜂窠を除去することによつて充分に處置し得ること、(2)之等の蜂窠の發育は迷路周圍蜂窠(乳嘴洞より後)の發育程度と略ぼ平行し、又一般に深在性乳嘴蜂窠の發育程度に略ぼ比例するも、鱗狀部蜂窠の發育には必ずしも平行し居らざりしこと、(3)10年以下の小兒にも此部に蜂窠の發育を見ること少からず、又(4)レントゲン検査により其の約 $\frac{2}{3}$ に於て此部の蜂窠存在を認め得たることを指摘し、尖端の病竈の處置に對してラマデー³⁾其の他の種々の術式提唱するも、この部分を注意鑿開すれば特殊の術式に據らずともこれより錐體病竈に到達し得る例少からざる可しと述べたり。

(自抄)

ロ、中耳根治手術後に殘存せる耳介後部瘻孔の處置に就て

中耳根治手術後耳介後部に大なる瘻孔を残せる患者3例に對して試み好成績を擧げ得たる成形術の經驗を述べたり。近く原著として發表の豫定なり。

17. 器械供覽 小田大 吉君

自家考按になる1、診療用卓子(看護婦の介補を必要とせざるもの) 2、「エーテル」麻醉用裝置 3、耳鼻咽喉科手術に當つて必要な器械を各手術に應じて配列し撮影せる寫眞、(熟練せざる看護婦と雖も手術準備に當り手落ちなからしむる爲に) 4、扁桃腺手術用の吸引器嘴端を供覽せり。(自抄)

18. 嚥下困難を初期徴候としたるハイネ、

メデン氏病 山 口 治君
菅 谷 正 雄君

演者は8歳の男子、晝食をとらんとしたる際嚥下不能なるに氣付き、發病6日目に四肢及び横隔膜の著明なる運動障礙を來し同日死亡したる比較的稀なる橋延髓型に初まりたりと思はせらるるハイネ、メデン氏病の1例を報告せり。尙ほ詳細は後日誌上に發表の豫定なり。(自抄)

19. 乳嘴突起炎手術後創面の傳染豫防に

就て 田 中 文 男君

演者は昭和10年、乳嘴突起炎手術後に於ける手術創よりの傳染につき、其の原因は新鮮なる軟部切開傷に對する乳嘴蜂窠内の起炎菌の傳染に因るものが大部分なりとの見解の下に、之が豫防として手術に當り皮膚切開後蜂窠鑿開に先立ちて軟部創面に「ウアゼリン」を塗布し、之を更に「リヴァノール」に漬せる綿紗を以ておほひ、以て創面と膿汁の觸ることを防ぐに勉めたり。斯くして演者の臨牀に於て昭和10年4.1%(乳嘴突起炎手術96例中4例)に見られたる創傷傳染(蜂窠織炎及び丹毒)が、之によりて昭和11年には3.4%(118例中4例)に減じたり。其の後之を勵行せし昭和12年(手術例142例)には1例の丹毒もなく、昭和13年(手術例145例)には再手術患者にてこの豫防法を行ひ得ざりしものに1例の蜂窠織炎を見たるのみなりき。演者はこの觀察によりてこの豫防法の有效なるを確めしものにして、之によつて安んじて乳嘴蜂窠鑿開を行ひ得るの確信に到達せり。